

第十一回滑稽俳句協会報年間賞決定！

天賞 工藤泰子（岡山県）

なかほどにお詰め下さい 鰯雲

受賞の感想

この度、第十一回滑稽俳句協会報年間賞の「天」に選ばれて、うれしさに舞い上がっております。もちろん「天まで」です。

秋の空、巻積雲が出てきました。空の雲なのに、さば、いわしなど海の生き物の名で呼ばれ、群れています。少し低いところに出る高積雲は、白いひつじの群れに見えます。人は、空という大舞台の「雲行き」で、天気や未来、そして天下を占ってきました。

鰯雲が、投網を投げたくなるような大きな群れで現れました。下界の駅のホームでは、「なかほどにお詰めください！」と駅員のアナウンスが流れています。混んでいるのは出入口で、中ほどは空いているはずです。

空の奥に、自分の居場所が見つかるのでしょうか？

レオ・レオニの絵本「スイミー」を思い出しました。みんなで助け合うお話でした。メルヘンで雲を掴み、鰯の頭は信じたい。

地賞 上山美穂（愛媛県）

電柱も棒立ちとなり冬の朝

受賞の感想

滑稽俳句協会報年間賞の受賞、大変嬉しく存じます。

いただきました賞の「地」は地球のイメージですね。ニュートンは林檎と地球が引き合う万有引力の法則を述べていますが、私と地球も引き合っているのでしょうか？

冬の朝、寒さにシャキーンと目覚めた様な気もするのですが、その一方では疲れがとれきれず夢うつつの様な気分で歩いていました。周りの木々や建物は、地に足をつけているはずなのに、ふわふわ浮いている様な、不

思議な感じで通り過ぎていきます。電柱は、まるでぼーっとして棒立ちになっているかのよう。

俳句は自由に気分を表現出来て、しかも何処か科学の法則にも則っていて、楽しいなと思います。

ちなみに、年間賞「地」の受賞を知った時、驚きと感激と恐縮の思いでいっぱいなのが、暫く棒立ちになっていたのは、言うまでもありません。

人賞 森岡香代子（愛媛県）

ほんとうはみんなかなづち鯉櫂

受賞の感想

第十一回滑稽俳句協会報年間賞の「人」に選んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

受賞の句は、いつの間にか思い込んでいることをゼロにして、先生の教えを胸に、素直に思ったことをそのまま書きました。

受賞の感想をうまく表現できないので、八木健先生と出会ってからの十数年間のお気に入りの句をご紹介します。

記念にと自分の投句を選句する

初参加の句会でのエピソードを詠んだ無季の句。句会は大爆笑になりました。

水鉢の魚動いて水笑ふ

初めて八木先生に褒めていただいた句。

満月を舐め終えたらし屋根の猫

娘が拾ってきた猫を私が面倒をみる羽目になりました。猫の恩返しか、会報で特選にとっていただいた句。

初蝶のよちよちあるくかぜのうえ

自然の豊かさからいただいた句。

さあ、今日からまた新たな気持ちで俳句を始めよう!!

選評 滑稽俳句協会会長 八木健

生き生きとした個性に瞠目です。滑稽句という「文化財」がまた増えました。

「天」…翳雲は神の造形作品である。「なかほどに詰めて」と声がけしてどうにかなるものではない。それを承知のうえで書いた写生句だが、遊び心がいいね。

「地」…電柱は常に棒立ちなのであるが、冬の朝は寒さゆえに緊張状態となる。佳い滑稽句は擬人化になりやすい。この句には、電柱と化した作者が存在している。

「人」…作者だけが発見したものを書き、読者は自分では気が付かなかったと悔しがる。森岡さんは、固定観念から自由になって物事を見ることのできる眼鏡を持っている。

令和四年八月号～令和五年七月号特選句

駅員の白き手袋夏燕	桑田愛子
歯の抜けたやうな町並み梅雨に入る	鈴鹿洋子
ストライクボールの声も汗をかき	遠藤真太郎
たたかれて熟してゐると言ふ西瓜	森岡香代子
どの子にも愛を等しく軒つばめ	柳 紅生
空(くう)を搔く今際の時の蟬の脚	渡部美香
くもの囀や数多の星をとらえたる	森岡香代子
パリッパリに乾くジーンズ夏 ^{さか} 旺ん	柳村光寛
押しだされ水からくりの心太	井口夏子
雷を避けて通れぬ避雷針	桑田愛子
放課後のいの一番のかき氷	久我正明
性格の違う ^{なすび} 茄子の光り合う	鈴木和枝
個人的にはよく分からない鮎の味	山本 賜

おひさまの角取れている今朝の秋	山下正純
鈴虫の籠 ^{かご} を振るなと言うたのに	八塚一青
秋の風ひとさし指でなめてみる	吉川正紀子
嫁と夫半分ずつの缶ビール	田中早苗
小旅行猪町を闊歩する	岡田廣江
ナイターに飛び交ふ野次の刺せ殺せ	壽命秀次
たうがらし色艶ともに勝気なる	西野周次
ごろんごろ冬瓜は主役になりたくて	和田のり子
ひやとひの群れる淋しさ曼珠沙華	田中 勇
なかほどにお詰め下さい鰯雲	工藤泰子
病むことを大いに語り敬老日	白井道義
見つめられ食われて赤面秋の月	花岡直樹
ご最眞の家を忘れず焼芋屋	竹下和宏
ヘアピンの指にヒヤリと冬に入る	桑田愛子
凧の果てはありけりビル谷間	井口夏子
パトカーの隠れてゐたる十二月	久松久子
毬栗を握ってみたいくなる衝動	赤瀬川至安
電柱も棒立ちとなり冬の朝	上山美穂
表裏裏裏表落葉道	小泉和子
芋掘りの園児コロコロバスを降り	壽命秀次
眼鏡掛け眼鏡を探すレノンの忌	峰崎成規
熱爛に決定女将の処方箋	月城花風
裸木に防犯カメラ臍のごと	大林和代
久々にポスト満腹賀状食べ	稲葉純子

一糸纏 ^{まと} はぬ裸木のほこらしげ	吉川正紀子
玄関に十四五足もありお正月	花岡直樹
しもやけの足しもやけの足で搔く	加藤潤子
吾の逝く日あると思ふよ初暦	ほりもとちか
初接吻出会ひ頭の獅子舞と	桑田愛子
吉野家の卵かけごはんも寒卵	金城正則
春寒しロールケーキに巻かれない	八塚一青
可愛いと褒めれば欠伸春の猫	ほりもとちか
盆栽も爺もひねくれ去年今年	南とんぼ
大根が幅を利かせてあるおでん	山本 賜
裸木に選挙ポスター ^{すが} 縋り付く	久松久子
入管の手続き踏まず来し黄砂	竹下和宏
啓蟄の鼻毛句会に出てきたか	加藤潤子
若布茹で化学変化のお勉強	山内 更
日脚伸ぶちよつと巴里まで宇宙迄	西野周次
日めくりの下で立春出番待つ	藤森荘吉
番犬を尻目に恋猫の出陣	久松久子
行先は俺も桜も同じ土	木村 浩
筍のゆですぎ会話はすみすぎ	加藤潤子
早よ歩けと圧力かける春一番	月城花風
子の通る度ひなあられ減ってゆく	ほりもとちか
「手を焼く」は火傷にあらず山笑ふ	荒井 類
初蝶のよちよちあるくかぜのうえ	森岡香代子

ワープロのあの字行進目借時	土屋泰山
ほんとうはみんなかなづち鯉幟	森岡香代子
来てくれて帰るから好き子どもの日	南とんぼ
泣き ^{ぼくろ} 黒子乾かしている梅雨晴間	桑田愛子
菜の花の黄の帝国となりにけり	田中 勇
海苔巻の黒船出たり江戸前屋	北熊紀生
地下出口自首するやうに炎昼へ	峰崎成規
意の ^{まま} 儘にジルバにレンバ水馬	西野周次
薫風はギザギザワニの齒駆け抜けて	上山美穂
逆上がりするたび開く百合の花	久我正明
父の日の自販機やさしき言葉して	高田敏男
他所の庭に生えてれば好き夏の草	南とんぼ